

とくがわいえやす

徳川家康を支えた

鬼の作左衛門と

福井の関わり



本田重次肖像
(国立歴史民族博物館蔵)

天 下人、徳川家康の三河時代を支えた家臣の一人に、鬼作左の異名を持つ本多重次がいます。

本多重次（通称、作左衛門）は、徳川家に家康の祖父の代から歴史し、奉行人として、財政・民政・司法に携わりました。重次と徳川四天王の一人、本多忠勝は、忠勝の5代前の本多定助を祖とし2つの家系に別れた一族であることでも知られています。

重次は、福井藩初代藩主、結城秀康と深い関係があります。家康の正室に仕える奥女中が家康の子ども

を身籠った際、正室の目を恐れた家康の命を受け、その子（於義丸。後の結城秀康）を引き取って育てたのが重次でした。重次は、秀康を徳川家随一の武将とするため、文武両面で懇切に指導しました。（二人の関係を象徴する小像が福井市立郷土歴史博物館に寄託されています。重次が幼少の秀康を抱えた姿で、松平春嶽が、秀康が葬られた孝蹟寺に安置されていた木像を模して铸造したといわれています。）

慶長5（1600）年、秀康は関ヶ原の戦いで活躍。その功績により、福井に68万石を与えられます。秀康

の福井入りに伴い、重次の甥、本多富正が付家老として府中城主（現在の越前市）となっています。

もう一つ、重次は福井と深い関わりがあります。それは、丸岡藩初代藩主、本多成重との関係です。秀康の死後、越前騒動で家老の今村盛次（丸岡城主）が失脚。これを受け、慶長18（1613）年、付家老として丸岡城（坂井市）に入城したのが重次の息子、成重でした。成重の入城には、こんなエピソードが残っています。本多富正は、「越前は大國にして肝要の地。誰かもう一人家臣を遣わしてほしい」旨を願い、従兄弟で同年の成重を希望したといいます（「富正公御代々覚書」）。その後、成重と富正、2つの本多家は藩政を主導。そして、寛永元（1624）年、成重は、大名として認められ、丸岡藩が成立しました。

現在、丸岡城の一角には、「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の銘文の碑が建てられています。これは、重次が妻に送った手紙でした。手紙に登場する「お仙」は、成重（幼名、仙千代）です。そこには、家を守り、家族を愛し、忠義を尽くす思いが簡潔に込められています。

この銘文は、坂井市が全国から一行詩を募集する「日本で一番短い手

紙 一筆啓上賞」創設の契機となりました。平成5年から続く「一筆啓上賞」。重次と福井の関わりは、今も続いています。

関連史料・ゆかりの地

丸岡城



本多成重の居城、丸岡城。天正4（1576）年に柴田勝家の甥、勝豊によって築かれました。2重3階の天守は、現存する十二天守の一つです。日本さくら名所100選にも認定されており、春には、満開の桜が霞ヶ城の別名にふさわしく、古城に美しさをそえます。

【住所】坂井市丸岡町霞町1-59（JR芦原温泉駅より京福バス永平寺行きで20分「丸岡城」下車すぐ）